

『ナイショなオレたち』

著：神奈木智

ill：桜城やや

シーツも枕カバーも、さらっさらの洗いたて。

おまけに、ベッドは広々としたキングサイズを新しく用意した。マットもスプリングも吟(ぎん)味(み)した上等品で、多少の振動など余裕で吸収してくれる。

要するに、いくらベッドで派手に騒いでも問題なしってわけだ。

「…長かったぜ、この日まで」

ベッドの傍(かたわ)らに佇(たたず)んで、棚(たな)橋(はし)夏(なつ)は思わず右の拳を握りしめた。思えばこの二ヵ月間、我ながら耐え切ったものだ。愛しい恋人と四六時中一緒にいて、時には寝食を共にしていながら、キスすら数えるほどしか許されなかったのだから。

「この俺が…俺サマが…偉いぞ、夏！ おまえは紳士だ！ 男の中の男だ！」

「…何を、自画自賛してるんだ」

「え……？」

半分呆れ、半分警戒気味な声が、唐突に後ろからかけられる。慌てて振り向いた夏は、そこに渋い顔をして立っている藤原(ふじわら)冬耶(とうや)の姿を発見した。

「さっきから、黙って見ていれば」

ジロリと夏の頭から爪先までを一(いち)瞥(べつ)し、ますます警戒の色を強めて冬耶は言う。

「ベッドの脇で一人で浮かれた声を出したり、派手なポーズを決めてみたり。春にはまだ間があるのに、ずいぶんとおめでたい様子だな。しかも、なんだその格好は」

「あ、これ？ いや、予定外に長引いた“仕事”がようやく終わったばかりだし。久しぶりに東京に戻ってきたんだから、思い切りリラックスしよっかなーと…」

「だからって、もう陽はとっくに高くなっているんだぞ！ いつまでもマヌケなパジャマ姿でいるな、だらしない！」

とうとう、お決まりの一(いつ)喝(かつ)が出てしまった。元・鬼の風紀委員長としては、確かに平日の昼間からパジャマ姿でうろうろしている輩など許せないに違いない。おまけに、夏が着ているのは Cotton の地に猫の足跡がプリントされた恐ろしく趣味の悪いもので、女の子受けの良い精(せい)悍(かん)なルックスにはまるでぐはぐな印象なのだ。

だが、しかし。秋に知り合ってから、そろそろ二人の付き合いも四ヶ月に及ぼうとしている。その間、ほとんど夏の側にいた冬耶には薄々わかっていた。

この男があえて突っ込まれるような言動をする時は、何かしら要注意なのだ。

「まったく…大至急こい、なんてメールが入るから、何かと急いで来てみれば…」

それでも、生真面目な彼は律(りち)儀(ぎ)に毎回ペースに乗せられてしまう。ふざけたパジャマ姿の夏とは対照的にきちんと詰襟を一番上まで閉じた冬耶は、小難しい顔を作りながら歩み寄ってきた。

初対面の頃から夏を魅了して止まない、墨(すみ)色(いろ)の潔(けつ)癖(ぺき)な瞳(とま)が

こちらを見上げる。銀のフレームの眼鏡越しからもわかる冴えざえとした美貌は、まるで手入れの行き届いた刀のようだ。そんな彼からの説教は常に気迫に満ちていて、普通の者ならばすぐに降参と諸手を挙げてしまうだろう。

ただし、夏だけは別だ。出会った頃から冬耶に怒られっぱなしで、今では彼の説教をBGMに眠れるくらいにまで馴染んでいる。けれど、そんな素振りを見せたら一大事なので、とりあえず神妙な表情で次のセリフを待った。

「いいか、棚橋」

「はい」

「おまえ、そもそもこのマンションはなんなんだ？ 寝室にはバカでかいベッドしかないし、他の部屋はほとんど使っている様子がないし。見たところ、まだ着替えの荷物すら整理していないようじゃないか。そんな調子で、本気で新しい仕事に取りかかれると思ってるのか？」

「新しい仕事？」

「とぼけるなっ！ おまえがそう言って、実家に帰っていた俺を呼び戻したんじゃないかっ！ 新しい“仕事”が入ったから、東京で落ち合おうと。それなのに、昨夜はなんだかんだと話をはぐらかして俺には何も教えないし、腹が立って家に戻れば、またメールで大至急来いなどと命令するし…。ふざけるのも、いい加減にしろっ」

「だから、ふざけてるわけじゃないって」

怒(ど)鳴(な)られるのにも少し飽きてきたので、ようやく夏は口を開いた。

「なあ、冬耶。俺たちは、なんなんだ？」

「な…なんなんだって……」

真面目くさった口調で問いかけてみれば、思った通り冬耶は勢いを失って戸惑っている。何故なら、自分たちには二通りの答えがあるからだ。

「黙ってないで、言ってみろって。ほらほら」

「だから…俺たちは、いわゆる学園の『なんでも屋』だろう？ もちろん、俺は棚橋に比べたら全然キャリアは浅いのは認めるが、早く一人前になっておまえの足を引っ張らないようにと、できるだけ努力はしているつもりだ」

「うん、まあ…冬耶の努力は俺も認めるよ」

最初の答えに関しては、それで正解だ。

高校生の彼らが学生業の傍ら手がけているのは、学校内のもめ事やゴタゴタを解決する『なんでも屋』と呼ばれるものだった。仕事なので当然ギャラが発生するし、支払いは『なんでも屋』を要請した各校の生徒会が責任を持つことになっている。だから、呼びがかかれば全国のどの高校へも出張して、一般生徒のふりをしながら問題解決に鋭意努力をするのだ。

だが、その存在はあくまでトップシークレットであり、『なんでも屋』の情報が回されている学校の生徒会役員にのみ代々伝えられているのが現状だ。当然、生徒会同様に『なんでも屋』にも代替りはあるが、彼らはきちんと組織化されたグループのメンバーであり、仕事の依頼やギャラの配当も組織のトップ連中が一手にとりまとめて指揮を執っていた。だが、まだ新入りの冬耶にはそれ以上の詳細はまったくわからない。昨年の冬、『なんでも屋』として自分の学校へやってきた夏と恋に落ち、自分も仲間になってくれと言ってついてきてしまっただけなのだ。最初は一人で消えるつもりだった夏も、両想いになった以上やはり冬耶とは離れがたくなって、異例ではあるがアシスタント

のような形で彼を自分の仕事に引き入れた。だから、組織のトップ連中が冬耶の存在をどう受け止めているのかは、甚(はなは)だ不安なところでもある。今のところは黙認しているらしく、仕事に赴(おもむ)く際のフォローは冬耶の分もしてくれるが、冬耶としては早く存在を認めてもらいたいという気持ちがかかなり強かった。そうでないと、いつまでも夏とは対等になれない。対等だという実感を得ないまま夏と一線を越えることには、大きな抵抗を感じていた。

だから、まだ二人の関係はキスどまりだ。厳密には一度だけ肌を重ねたことがあるが、体温と快感を分かち合っただけで、身体の方は繋げなかった。

「そうだよな、確かに俺たちは仕事のパートナーだ」

やたら深刻ぶった声音(こわね)で、夏はゆっくりと事実を再確認する。

「…で？ 他には？」

「まだ、あるのか？」

「あつたりまえだろう。まさか、それだけとは言わないよな？」

「……………」

今度は、あからさまに冬耶の答えが詰まった。

夏は満足そうに困惑した綺麗な顔を眺(なが)め、もう一度同じ質問をする。

「冬耶、俺たちはなんなんだよ？」

「…棚橋は、一体俺に何を言わせたいんだ。そんなの口に出さなくたって…」

「じゃあ、このバカでかいベッドがなんのためなのか、わからないとは言わせないぜ？」

そう言うが早いのか、夏は素早く冬耶の腰に両手を回した。見た目の印象を上回る細腰は、何度腕に抱いても夏をときめかせる。だが、このまま甘い気分浸(ひた)るためには、まず彼の眼差しの許しを得なければならないのだ。

幼い頃から祖父に武道の手ほどきを受けている冬耶は、本来なら不意の攻撃などものともしない。それがあっさり夏に抱かれるだけでも、かなりな特別扱いと言えるだろう。だが、そんな特別な相手で、しかも艶めいた事柄では自分よりもよっぽど場数をこなしている夏に向かって、怖いもの知らずの冬耶は横柄とも言える目付きでこちらを見返してきた。

「こんな不(ふ)埒(らち)な真似をして…。この部屋は、新しい仕事のために借りたんじゃなかったのか？ 祖父母の様子を伺(うかが)いに帰った俺を、どうして急に呼び戻したりしたんだ？」

「いちいち説明しなくたって、わかるだろ。冬耶、根性曲がりすぎ。俺、これでもかなりおまえのペースに合わせてるんだぞ。でも、もうそろそろ限界だ。あのな…」

「え…？」

「どこまで俺にしゃべらせる気なんだよ、おい！」

たまりかねて軽く揺さぶると、ようやく冬耶の表情が柔らかくなった。彼は優しくなった目許で拗ねる夏に微(ほほ)笑(え)みかけ、そっと自分から顔を近づけてくる。唇を割って桃色の舌がなまめかしく姿を現し、あっと思う間もなく夏の鼻先を舐めていった。

「な…っ…。おおお、おいっ、冬耶、今のは…………っ…」

「単なる挨拶だ。そんなに狼狽(うろた)えるな」

「挨拶って、おまえっ、どこの誰からこんな真似教わったんだっ」

不本意にも頬を赤く染めながら、夏は子どものように声を張り上げる。自分が惚れ

た藤原冬耶は微笑ましいほどに不器用で、仏頂面のため誤解もされやすく、そこがまたグッとくる所以(ゆえん)でもあったはずなのに。いつの間にか、こんな隠し技を持つようになっていたなんて。

あんまり夏が色を失っているのに、冬耶はついに小さく笑い出した。彼が声を出して笑うなんて滅多にないことなので、ますます夏は混乱する。お得意の調子の良さで煙に巻き、どさくさまぎれに押し倒してしまおうなんて姑息なプランは、跡形もなく崩れてしまった。

「まいったなあ……」

他になんて言ったらいいのかわからず、深々と夏は嘆息する。

「なあ、俺の鼻ってそんなに美(う)味(ま)い？」

「…そうだな」

くだらない質問を受けて、冬耶が少し笑みを引き締めた。

「棚橋のことは、どの学校へ行っても必ず女子の噂になるだろう？ それも当然だ。鋭い目付きを軟派な表情で包んで、遊び慣れた雰囲気も引き締まった声音で上等に見せかけてるんだからな。おまえのだらしなく伸ばした髪や、軽薄な栗色も、彼女たちには小綺麗に見えるらしい」

「…だから？」

「せめて、鼻くらいは唾をつけておこうかと」

大真面目に答えると、冬耶はもう一度微笑んで再び唇を寄せてくる。夏の腕は、まだしっかりと彼を捕まえたままだったのだ。思わず(でかした、俺!)と心で叫び、夏も心持ち顔を傾ける。間を空けず柔らかな感触と共に唇が重なり、深くしつとりと合わさった。

本文 p10～17 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>